

「声」に載った特攻隊員の身内の手記

2011年2月20日の朝日新聞朝刊の「声」欄に掲載された「特攻機遺族の心受け止める」と題する記事がふと目にとまった。私は普通「声」欄をきちんと読むことはしていない。だから、今回この記事に気付いたのは偶然のことだった。その「声」は、中学教員で50歳の柴谷健さんが書いたもので、5日前の2月15日の「声／語りつぐ戦争」欄に掲載された「母思いの弟は特攻で散った」を取り上げたものだ。柴谷さんが取り上げた「声」を書いたのは花田千代さんという93歳の女性だ。私は、15日の朝刊に出た花田さんの「声」には気付いていなかった。

柴谷さんは、花田さんの「声」が、花田さんの実弟の林市造海軍少尉のことを書いたものだという事に気付いたのだ。柴谷さんは大変な注意力の持ち主のようだ。柴谷さんは、林市造さんが母君宛てに書いた手紙が「きけ わだつみのこえ—日本戦没学生の手記」（岩波文庫）に載っていることを知っていたのだ。言うまでもなく、「きけ わだつみのこえ」はアジア・太平洋戦争中に戦没した学徒兵の手記を集めたものだ。

柴谷さんは、中学校の歴史の授業で、林市造の手紙を生徒に読ませているそうだ。その一部を引用したあと、柴谷さんは次のように書いている。

『切実な思いが胸にこみ上げてきます。特攻隊員の本当の気持ちを知って、多くの生徒は涙します。私は最後に話します。

『日本は戦争に負けた。では特攻隊や原爆や空襲で、戦争で亡くなった約300万の命は無駄になったのか。いや違う。多くの犠牲を出して、私たちは戦争のむごさ、平和の尊さを知ったのです。』特攻隊員の遺族の思いは、私たちが次の世代に伝えていかなければならない大切なメッセージだと思っています。』

柴谷さんと花田さんの「声」を読んでから、私は、「きけ わだつみのこえ」の中の林市造の手記を読んだ。それでわかったことは、この手記は私の記憶に残っていたものだったということだ。林市造という名前は忘れていたが、他の多くの手記と違って、母君に対する気持ちを子供のように素直に書いていることが、私の記憶に残った第一の理由だった。長い手紙で、次のように書き出されている。

『お母さん、とうとう悲しい便りを出さねばならないときがきました。

親思う心にまさる親心今日のおとずれ何ときくらむ（吉田松陰辞世の歌）

この歌がしみじみと思われます。』

子供が書いたような感じが一番よく出ているところは次のようだ。

『私もまだ母ちゃんに甘えたかったのです。この頃の手紙はどうれしかったことはなかったです。一度会ってしみじみと話したか

ったのですが、やはりだかれてねたかったのですが、．．．（中略）この手紙は出撃を明後日にひかえてかいています。』

この手紙が私の記憶に残ったもうひとつの理由は、林市造も母君もクリスチャンだったことだ。それについては次のような記述がある。

『私はこの頃毎日聖書をよんでいます。よんでいると、お母さんの近くにいる気持がするからです。私は聖書と讃美歌を飛行機につんでつっこみます。それから校長先生からいただいたミッションの徽章とお母さんからいただいたお守りです。』

この手紙は1945年3月31日に書かれたものだ。これを受け取ったあと暫くしてから、母君はわが子が特攻出撃から帰らなかったことを知らされ、また戦死の公報も届いた。それで母君は一気に老けてしまったと、花田さんは書いている。

林市造は1922年2月6日福岡県に生まれた。旧制福岡高等学校を経て、1942年10月京都帝国大学経済学部に入學した。1943年12月の学徒出陣で、佐世保にあった第2海兵団に入隊し、北朝鮮の元山（ウォンサン）での飛行訓練を経た後、1945年4月12日神風特攻第2七生（しちしょう）隊の一員として、海軍航空隊串良基地（串良は現在鹿児島県鹿屋市の一部）から出撃して、沖繩沖で戦死。23歳だった。林は飛行の技術が抜群に優れていたために、同期生のなかでは最も早く特攻隊員に選ばれたようだ。彼自身、喜ぶべきかどうか戸惑ったことだろう。若くして召された林市造は「神が愛でし人」だったのだろう。

産経新聞社が2001年に出版した「あの戦争 太平洋戦争全記録」によると、上記の1945年4月12日には、多数の特攻機が沖繩周辺のアメリカ機動艦隊を目指して出撃しており、かなりの戦果があがったことになっている。しかし、林少尉がどういう最後を遂げたかまではわからない。

特攻というものについては、多くの議論がなされてきた。特攻には、航空機によるもの以外に、人間魚雷回天などによるものもあり、全体像をつかむのは容易ではない。海軍だけでなく、陸軍にもあった。

どれだけの若い人々が特攻に加わって亡くなったのか、資料によって違いがあるが、海軍航空特攻だけでも2,531名の戦死者を出したというデータもある。その多くは林市造のような一般大学出身の学徒兵だった。現在の防衛大学校に当る海軍兵学校出身の特攻隊員としてよく知られているのは、関行男（せき・つらお）大尉だ。関大尉は航空機による特攻の第1号とされており、1944年10月のレイテ沖海戦で神風特攻敷島隊を率いて、護衛空母セント・ローに突入し、これを撃沈したことになる。

関行男は、出撃する前に次のように語ったと言われている。

『僕には体当たりしなくても敵空母に500キロ爆弾を命中させる自信がある。日本もおしまいだよ、僕のような優秀なパイロットを殺すなんてね。僕は天皇陛下のためとか日本帝国のためとかで行くんじゃないよ。妻を護るために行くんだ。最愛の者のために死ぬ。どうだ、素晴らしいだろう。』

関は23歳で、新妻がいた。林市造も婚約する予定になっていたようだ。特攻は、海軍兵学校出身者にも一般大学出身者にも同様に過酷なものだった。

航空特攻というものは究極の自己との戦いだ。たった一人で、激烈な対空砲火をかわしつつ、敵艦に突入するのだ。それに至るまでの心理的重圧はいかばかりだったか。それに耐えて数千の若者が散ったことは今では不思議にさえ思える。アジア・太平洋戦争が終わってから66年経った今になっても、まだ特攻隊員の身内からの「声」が新聞に掲載され、それをしっかりと受け止める戦後生まれの人がいる。特攻という行為が人々に与えたものの大きさを改めて感じた。（おわり）